



かめっ子

学校だより 5月号
令和7年4月30日
足立区立亀田小学校
校長 井上 龍夫

「ハードルを下げない」

校長 井上 龍夫

「風薫る5月」を迎え、新緑が眩しい季節となりました。登校してくる子どもたちの挨拶は一層瑞々しく、街を吹き渡る風のように爽やかです。特に6年生による登校時の挨拶運動には、私も、そして同じようにこの春「かめっ子」としてデビューした1年生も随分と励まされました。最高学年としての自覚に溢れる姿に優しさとたくましさを感じました。きっと、いつかはみんなあんな風に・・・と憧れる後輩も多いと思います。でも、6年生だって、初めからそうだったわけではないはずです。きっと憧れや目標、めあてをもち、その達成に向けた日々を積み上げてきた成果だと思っています。

私は始業式で、「今年やりたいことや今年のめあてはありますか。」と子どもたちに問いかけました。大きくうなずく児童をたくさん見かけてうれしかったです。私の目指す「夢を育む学校」は、「こんなことをしてみたい」「こんなふうになりたい」という思いや願い、めあてをもち、その実現に向けて頑張れる児童を育てる学校です。教育活動においては、常に自分なりにめあてをもって学ぶこと、そして、成功体験を積み上げることに力を入れていきたいと考えています。ただここで少し注意したいことがあります。

先日私はある場所で陸上競技の大会を見学する機会がありました。私は走力にプラスして技能が問われる「ハードル走」が好きで、注目していました。選手が軽やかにハードルを越えていく様子は美しいほどですが、実はこのハードル、高さは、男子106.7cm、女子は83.8cm！もあるのです（男子110mハードル、女子100mハードルの場合）。小学校の体育科でも高学年では「ハードル走」の授業があります。さすがにそこまで高いハードルは使いませんが、初めはリズミカルにまたぎ越せない児童が多くいます。そんな時に安易にハードルの高さを低くしてしまう指導者を見かけます。これは少し考え物です。あまりに低くすると越えるための工夫がなくなり、「抜き足」や「振り上げ足」など、ハードル走で身に付けてほしい技能が身に付かなくなってしまうのです。跳び箱運動でも同様に、安易に跳び箱の段数を低くすると、脚だけで跳ぶようになり、手で突き放す「支持跳び越し」は身に付きません。

このことは学習だけでなく、生活面など多くの場面でも言えるのではないのでしょうか。安易な迎合や妥協ではなく、成長に必要な「ハードルの高さ」は、私たち大人が共有したいものです。引き続き、本校の教育活動へのご理解とご協力をお願いいたします